

原稿



可認物便郵種三第省信週日六十二月二十年一十三治明
行發日五十日一回二月每行發日五十月六年五十三治明

報時教政

號一十八第

論說

宗教問題解決の要點

(社説)

宗教なき國民
我國過去の宗教的經營
現時教界不振の病根
社会上宗教修養の缺乏
歐洲の教會經營及宗教教育
解決の要點は實行にあり
適切眞摯なる實行

柏原文太郎

社會

◎動物虐待防止會◎夏期巡迴講義◎慈善旅行◎淨土宗の近時

〔海外時事〕

視察

プロイセンの貴族院

池山榮吉

信界

基督教外國傳道の發達

近角常觀

讀經餘瀝

古今

▲教界彙報▼

待山生

チンツェンドルフ伯

▲社會小觀▼

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査する事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して善真なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、種民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむる策を講ずる事。

政教時報

宗教問題解決の要點

宗教なき國民

我國の社會に於て現時最も渾沌たるものは、實に宗教問題也、將來に於て猶最も望洋の嘆あるものは宗教問題也、維新以後、憲法を始めとして、法律制度、政治、經濟、軍制、教育、一に範を獨英佛にとりて、一往面目を整頓したりと雖、獨り宗教上に至りては、悠悠三十五年、未だ何等の施設經營の見るべきものなく、他の諸種部門の發達と平行せざることを遺し、故に足一たび泰西の地を踏みて、彼か宗教を重んずるを見、彼か宗教を經營するの備れるを見、而して辭つて之を我國の現狀に比較し來りて實に斷腸の思に堪へざるものあり、吾人は今更宗教の必要を論ぜざるべし、唯吾人が朝野の諸士、教界の内外に向て切言せむと欲するものは、他なし、我國の應用したる制度文物なるものは、何れも宗教組織と密接の關係を有せざるはなく、又我國の模範とせる教育機關なるものは、宗教經營と平行して初めて其功力を顯はすものなり、故に宗教の組織經營整頓せざる以上は我國の文明は、たしかに其一半を荒涼に委するものと云はざるべからず、伯林大學教授

ハルナツク氏總長たりし時、吾人に問ふて曰く、貴國より來りて本校に遊ぶもの、入學の際皆答ふるに無宗教を以てす、是れ果して何の理由によるかと、蓋し是れ細心味ふべきの言と謂ふべし、洵に宗教は母也、我國民果して母なきか、或は之を忘れたるか、吾人は他の備るを見て、初めて我が不足を感ずるの情頗る切也、たしかに我國民は父母を忘れ山野に流浪せる長者孺子の境遇にあるもの、須らく一日も早く宗教的自覺を生じて、慈母の膝下に後歸すべき也、

我國過去の宗教的經營

人屢言へるあり、吾國人は本來宗教に冷淡なりと、予以爲らく、宗教に冷淡なるは現今一時的の顯象のみ、過去の歴史を回想するに、我民族が宗教上に於ける信仰及經營の點に於て其能力を發揮せしこと、他の政治、軍制等に於けると比較するに優るあるも劣ることなし、又從來吾國の宗教的人物に富めること泰西宗教界に同じくして時としてはより偉大にして其上に出づるものあり、聖德太子は敬虔なる信仰を抱き、佛教を經營興隆して國家經綸の根本義とし、政教相資の道を開きたるは、コンスタンチン大帝か羅馬帝國に向て世界的基督教を以て國教となしたるに比すべく、而して其信念、施設、一層眞摯にして誠實也、當時鑿與、行基等幾多の熱誠なる僧侶支那朝鮮より來りて傳道に熱中したるは、恰も原始的基督教が小亞細亞を出で、希臘羅馬に福音を運びたるに似たり、南都

政 教 時 報

宗 教 問 題 解 決 の 要 點

宗 教 な き 國 民

我國の社會に於て現時最も渾沌たるものは、實に宗教問題也、將來に於て猶最も望洋の嘆あるものは宗教問題也、維新以後、憲法を始めとして、法律制度、政治、經濟、軍制、教育、一に範を獨英佛にとりて、一往面目を整頓したりと雖、獨り宗教上に至りては、悠々三十五年、未だ何等の施設經營の見るべきものなく、他の諸種部門の發達と平行せざること遺し、故に足一たび泰西の地を踏みて、彼か宗教を重んずるを見、彼か宗教を經營するの備れるを見、而して辭つて之を我國の現状に比較し來りて實に斷腸の思に堪へざるものあり、吾人は今更宗教の必要を論ぜざるべし、唯吾人が朝野の諸士、教界の内外に向て切言せむと欲するものは、他なし、我國の應用したる制度文物なるものは、何れも宗教組織と密接の關係を有せざるはなく、又我國の模範とせる教育機關なるものは、宗教經營と平行して初めて其功力を顯はすものなり、故に宗教の組織經營整頓せざる以上は我國の文明は、たしかに其一半を荒涼に委するものと云はざるべからず、伯林大學教授

ハルナツク氏總長たりし時、吾人に問ふて曰く、貴國より來りて本校に遊ぶもの、入學の際皆答ふるに無宗教を以てす、是れ果して何の理由によるかと、蓋し是れ細心味ふべきの言と謂ふべし、洵に宗教は母也、我國民果して母なきか、或は之を忘れたるか、吾人は他の備るを見て、初めて我が不足を感ずるの情慙る切也、たしかに我國民は父母を忘れ山野に流浪せる長者駢子の境遇にあるもの、須らく一日も早く宗教的自覺を生じて、慈母の膝下に復歸すべき也、

我國過去の宗教的經營

人屢言へるあり、吾國人は本來宗教に冷淡なりと、予以爲らく、宗教に冷淡なるは現今一時的の顯象のみ、過去の歴史を回想するに、我民族が宗教上に於ける信仰及經營の點に於て其能力を發揮せしこと、他の政治、軍制等に於けると比較するに優るあるも劣ることなし、又從來吾國の宗教的人物に富めること泰西宗教界に同じくして時としてはより偉大にして其上に出づるものあり、聖徳太子は敬虔なる信仰を抱き、佛教を經營興隆して國家經綸の根本義とし、政教相資の道を開きたるは、コンスタンチン大帝が羅馬帝國に向て世界的基督教を以て國教となしたるに比すべく、而して其信念、施設、一層眞摯にして誠實也、當時靈異、行基等幾多の熱誠なる僧侶支那朝鮮より來りて傳道に熱中したるは、恰も原始的基督教が小亞細亞を出で、希臘羅馬に福音を運びたるに似たり、南都

の朝に於ては上下慈愛的精神發達し、内廷政令悉く宗教的の念の横溢せるをみる、特に天武の朝、全國に向て宗教的大經營を爲したるが如き、カール大王の偉蹟に似たり、且又光明皇后の身自ら佛陀の慈愛を事實的に發現せしを初めとして、當時慈善事業の實際的躬行は彼のセント、アントニウス、及びセント、フランシスカスを想起せしむるものあり、傳教、弘法兩大師慨然海を渡りて、生氣ある佛敎を傳へ荆棘を啓きて叡山、高野を開闢し、特に天下を周遊して濟民と傳道とを事とし、遂に平安朝佛敎組織の根柢を作りたるは、恰もセント、アグステンが海を渡りてブリタニアに傳道し、現今の英國教會の基礎を作り、ボニフラスがゲルマンの深林に入りて福音を傳へたるが如し、鎌倉時代に至りては、實に日本宗教の精華也、榮西、道元禪師あり源信僧都あり法然、親鸞上人あり、聖覺法印あり笠置に解脱、梅尾に明恵あり、日蓮上人あり、敎に殉ずるものあり、野に叫ぶものあり、其信念の固執せる、其自信の確立せる、社會に生命を與へ、國民に平和を持來せり、詳かに之を歐洲の宗教改革時代の人物に比するに毫も遜色を見ず、メラントンの知識、ルーテルの信仰、エラスムスの學問、ツザングリの勇氣、カルヒンの實行、カールスタットの社會的傾向、悉く類似を吾鎌倉時代に見る、特に印度已來理想の點に於てのみ發達せし佛敎は、鎌倉時代に於て大に實際的施設に偉大なる結果を來たし、宗派組織の根柢を

此時に殖へたり、爾後遺如上人の如き大傳道家の出づるあり、石山戰爭の如き宗教的戰爭あり、已上の所説を以て、過去に於ける我民族が宗教信念に於て如何に徹底なりしか、宗教的經營に於て如何に成功せしかを知るべし、借哉徳川氏三百年の昇平は百般の社會をして眠に陥らしめ、特に其後半已後宗教的精神益々枯死し、其極に達したるの時に當りて、恰も維新の大變動を來たし、爾後物質文明の輸入に汲々として、一氣呵成今日の狀態に至り、社會は腐敗し、道義は地に墜ちたり、而して人稱して宗教に冷淡なる民族と云ひ、自ら無宗教の國民と稱す、豈慨すべきの至りならずや、然れども時は機運を促し來りて、今や正さに宗教的自覺を生ずべきの時期に達せり、信仰を求むるの叫は四方に響き、宗教を呼ぶの聲は社會に共鳴し來る、至誠摯實の士、心を潜めて、宗教不振の病根を察し、徐ろに之が救済の策を講ぜざるべからざる也

現時敎界不振の病根

既に我民族に於て此の如き宗教的能力あり而して現時宗教に冷淡なる此の如し、既に文明制度を運用するの頭腦あり、而して獨り宗教問題の解決に苦むこと此の如し、蓋し是れ社會の根柢に於て必ず宗教不振の原因潜伏するに由るなるべし、今や天下舉て偉人の出現を呼び、信仰の復活を望む、是洵に可也、然れども偉人無爲にして來り、信仰亦修養なくして來るものならむや、漫然として呼び、徒らに天を仰て望む、

何の益か之あらむ、請ふ瘡かに其病根を察せんかな、

維新以後百般の部門は、其組織を一變し、政治、實業、工藝、文學、醫師、軍人、何れも舊來の腐敗沈滞せる空氣を一掃し、社會全般より各部に適當なる能力を有せる健全なる新分子を集め、其自由競争に一任し、其最優者のみを以て組織せらるゝに至れり、みよ、醫師に昔の如く家柄なく、軍人亦舊の如く血統によらず、其性質克く醫に適し又軍人に適して之を以て職とせむと欲するもの、醫となり又軍人となる、而して獨り宗教界に至りては則ち然らず、眞宗の如きは家族的宗教組織なるを以て、幼よりして特に宗教的修養を興へ、其實子をして其寺を繼がしむるを以て、出來得べき限り親たるもの最も完全なる教育を授くるの便ありと雖、各人の性質必しも宗教的なりと斷言すべからざるものあり、之を以て各部門が夫々適當なる才能を有する健全分子を集むるものに比すれば、既に一步後れたるものあり、而して眞宗以外の宗派は如何、是生れて傳たるにあらず、必ず何等の原因ありて出家道に入りたるもの、原則としては、たしかに社會より宗教的性格を具へたる健全分子を集め得べき筈なり、然るに事實は之に反し却て今日幼にして僧となるもの多くは社會的境遇より來るもの多し、親を失ひて孤兒依る所なく寺に入るものあり、身體羸弱他の職に堪へずとして寺に入るものあり、家貧にして寺に入るものありと、吾人之を個人の増進より觀察す

るときは、寧ろ其不幸に對して同情に堪へざるもの多し、然れども他の同情を受くる丈、何れかの點に於て不完全なるものにして、若し忌憚なく云はしめば寧ろ社會不健全なる分子を驅り集めたる感なしとせむや、勿論孤兒の如き、貧兒の如き、宗教的教育其所を得たらむには、宗教に入るの因縁として寧ろ適當ならむか、蓋し是れ舊敎か貧兒を以て僧となすを原則とする所以なり、然れども孤兒必しも宗教的性格を有すとは云ふべからず、況んや宗教的教育をも興へず、他の不幸なる兒童をして、徒らに經文を讀誦せしめ、儀式を執行せしめ、長するに及び之に委するに宗教家なる大任務を以てし、之に堪へざるを見て、直ちに之を攻撃す、社會の宗教家を遇する冷酷と謂ふべし、勿論吾人は實に現時宗教家の腐敗を憤慨するものなり、然れども一步進みて其社會的原因を察すれば此の如くならざるべからざる原因ありて此の如くなれるもの極端に云はしめば、一種の社會問題と謂ふべし、即ち今日の敎界組織の根本に於て他の部内と平行すべからざる運命を有するものなり、是敎界不振の根本的の病根なりとす。

社會上宗教修養の缺乏

翻て吾人は社會全般に於ける宗教觀念を檢せむかな、抑々信仰は各自の生命にして、泓動の根原なり、人にして宗教なきは道德の根柢なきなり、生活の目的なきなり、而して吾國人の宗教に對する態度頗る不眞面目也、宗教を以て閑事業

とし他の遊戯の如く考ふるに非れば、單に葬祭の儀式として一種の裝飾の如く見做すもの多し、彼の現世福祿を主とする輩の如き其毒害の甚しき云ふまでもなし、偶々多少宗教的修養を爲したりと云ふものも、道樂的に座禪に耽るにあらざれば、教理の斷片を聞き覺えたるに過ぎず、試みに彼等に向て佛教の眞髓は如何、信仰の決着は如何等の問題と與へよ、果して明晰なる答辯を爲すもの幾人ある、唯漫然として演説を聞き、雜然として冊子を繕き以て自ら得たりとす、其要領を攫取し得ざる洵に其所也、現時日本社會に於て宗教として最も修養を重ね、其信念の強固なるは、上流人士、若くは讀書社會にあらざして、素朴敦厚なる田舎間の信徒にあり、吾人は彼等の間に於て佛陀の生命が、たしかに傳はりつゝあるを確信するものなり。

吾人は進んで、所謂無宗教を以て標榜して起つ社會に警告せむ、夫れ宗教は社會の宗教にして宗教界の宗教にあらざり、今日社會が冷然として宗教界を批評するが如きは、社會が未だ宗教的自覺を生ぜざるの證據なり、而して宗教家も亦宗教を以て私事の如く考へ、宗教的運動を以て自己の利益運動の如く妄想するが如き度すべからざる極と謂つべし、蓋し宗教家なるものは國民靈性の開拓を事とする神靈なる職務にして天下の大なるも猶以て換ふるに忍びざるものなり、社會は之が腐敗を認めなば、腐敗せる分子を追放して、健全なる分子を

となれば彼は我民族に最も敵亡せる血液を有すれば也、活躍達觀の士は須らく靜かに其來る所遠き所を察すべし畢竟今日社會に於て秩序ある宗教的修養の敵亡は社會腐敗の原因也。此の如く教界は健全なる分子を敵き、社會は宗教的修養を敵く、此二者は互に原因となり結果となり本來宗教的なる我民族の性質を麻痺せしめ教界の内外の空氣をして沈滞せしめ社會をして化石枯死せしめむとするに至る、然らば歐洲諸國に於ける。内外兩方面に於ける宗教の經營及び修養果して如何。

歐洲の教會經營及び宗教教育

歐洲に於ける教會の經營は至れり盡せるものにして、舊教は今猶儼然として中世已來の教國主義をとり、羅馬マテカンより出づる政令は、佛、埃、匈、白を初めとして、山をへ越えて獨の一半を左右し、海を涉りて愛蘭を占め、特に新大陸米國に於ては、其教域の擴張囂々として恐るべきものあり、新教に至りては、英國教會は全國を分て三十四の教監區としカンタベリーの大教監之を總轉し、加奈陀に、濠州に、印度に、其他各地殖民地に堪忍不撓なるアンクロシアキソンの勢力と共に其大業を成就せり、獨の新教は獨逸建國と切實なる關係を有し其質朴勤勉なる國民性を以て緻密なる經營をなせり、之を要するに歐洲に於ける宗教的經營は他の部門の經營と相平行して進歩せり、故に宗教家なるものは他の政治家

以て之を經營し之が刷新を斷行すべき也、猶進んで論せむ、百般の部門世の所謂政治、實業、等に於て、唯是のみにして宗教修養を缺きたらむには、其最終の目的を見る能はず何れも皆無意義なるものと成り了らむのみ、政治家にして宗教心を缺かむか、權謀、術數、機を制し、虛を衝き、一勝一敗、掌中天下を弄して、快を一時にとるに過ぎざるのみ、實業家に於て宗教を缺かむか、弱を伏し、他を欺き、機に投じ、險を冒し、一擧、百萬の富を致して事終らむのみ、唯人生は權勢と利益の外、何等の目的を有せざるものたらむ、若果して權勢利益の外何等の目的なしとせば權勢の爲めに節を折り、誠を呈し、利益の爲めに詐偽を行ひ他を陥罪するも何の辭する事かあらむ、是今日政治界の腐敗する所以、節操なき所以迎合主義行はる、所以にして、實業界の投機的なる、資緣的なる、日本國民の實業上の信用なき、忍耐力なき、着實ならざる所以也皆是れ宗教的信仰が政治界實業界中に浸潤せざる結果にして、維新の功臣、紳商が宗教を破壊し、道徳を無視したる結果の今日に報ひ來りたるもの也、看よ、彼の英國が、印度に南亞に、全体としては頗る不道徳極る非人道的なる政策にも拘らず、一旦採りたる方針を履行して、百折不撓遂に成功したる所以のもの、たしかに其民族が宗教的修養によりて獲得したる、堅實なる志操と忍耐力に由るものなり、吾人は其政策を惡むこと甚しと雖、其性質を欲する頗る切也、何

實業家なるものと同じく、有爲の士、健全なる分子を吸收し得べき組織にして、英に於てはケンブリッジ、オックスフォード、エヂンバラ等の諸大學及ロンドン大學キングスコレッジを初めとして、必ず神學科の設けあり、之に加ふるに全國十五箇の神學校ありて、國民中宗教的性質を有し、宗教を以て自己の本職となさむとするもの入りて以て學ぶべく、業成りて亦社會的の勢力を占むべし、カンタベリーの大僧正は、年金十五萬圓、上院に入りて皇族の次位を占め、ロード、チェンシエラーを除きてはすべて國務大臣の上に位す、已下以て准知すべし、獨逸、埃國、及瑞西に於ける大學總數三十四校あり、其各大學一として神學科の設けあらざるなし、單に新教科を授くるものあり、單に舊教科を授くるものあり、又或大學は此兩科を設くるあり、故に宗教が、他の政治經濟哲學文學等と相平行して研究され、宗教家か其人物の點に於ても、智識の點に於ても、他の部門に後る、なく、其勢力を増進する所以のもの決して故なきにあらざるなり、否啻に他の部門と平行するのみならず、寧ろ神學科は諸科の第一位を占め、特に獨逸大學の或者は各科共通の神學科目講義一週必ず三四時間ありて、全校の生徒をして隨意之を聽講せしむ、又英の大學コレツヂに長なる人多くは僧侶にして他の部門に入る人と雖、宗教を以て徳育の根本となす、既に此の如く健全の分子を集め、猶其優勝者を以て教界を組織す、僧侶は地位高

尙國家は適宜の給俸を拂ふ、直に宗教家たるの品位を保ちて其天職を全ふるもの決して怪しむに足らざるなり。

教會内部の組織此の如し、而して外部社會に於ける宗教的修養を檢せむかな、抑歐洲現時の社會なるものは、中世宗教政治時代が宗教改革の變動の爲めに破壊せられ、以て現時列強の基礎を固めたるものにして、宗教は寧ろ建國に先ちて社會の地盤を作りたるものなり、故に風俗、習慣、儀式、制度、皆宗教に關係あらざるなく、誕生、元服、結婚、葬送、人事の始終一として宗教と深き關係を有せざるはなし、殊に兒童幼年の時、毎週教會に於て、數年間、大小兩種の教理問答抄を授け、基督教徒として其要義を心得しめ終りて後、初めて教會に於て元服式を擧げて以て成人の資格を具へしむ。宗教としては最も肝要なる幼年期に於て此修養を成す以て其功力を察すべし、是教會直接の仕事なり、而して他の教育部門に於ける宗教的修養を察せよ、即ち歐洲諸國に於ては初等教育、中等教育に於て宗教は實に第一位を占むべき肝要の課題として秩序的修養を興ふるなり、先づ小學校に就て云へばプロイセンに於ては一週に四時間若くは五時間の宗教教育を授けバイエルンに於て、多きは六時間に至り、宗教教育及聖書歴史を授け、オルデンベルヒには九時間を授くるに至る其他獨逸各聯邦何れも宗教教育を授けざるはなく、級の上下に隨ひ、一週間少くとも二時間多くは六時を授くるなり、其他

高等學校、實業高等學校、上等實業學校、實業學校、高等女學校、女子高等學校等何れも三時間の宗教教育を授けざるはなし、而して學校教師か他の科目と同じく新舊兩教其所屬宗旨の教義より、教會史に至るまで其要領を授く、奧大利、和蘭何れも獨逸に同じ、佛國は學校に於て宗教を授けざるも、時間を與へて各自其教會に就きて學ばしむ、伯耳義に於ては教會より僧侶來りて學校内に於て授く、英國に於ては學校は二種に分れ、一は私設學校にして、英國教會に屬する學校、國教主義の貧民教育を獎勵する國民協會に屬する學校、ウエスレー學校、舊教學校等なり、他は學校局所立の小學校なり、前者は既に教會所屬の學校なるが故に、各其教會の主義を以て宗教教育を授け、後者は單に聖書を授けて宗教教育をなせり、此の如く歐洲に於ける教育制度は、方法に於て多少の相違ありと雖、何れも宗教を以て、德育の根本義とし、教育の精神となす、人耕さずして豈收獲あらむや、基督教歐米に於て深く社會地盤の下に其根を張り、千古抜くべからざる勢力あるもの洵に偶然にあらざる也

解決の要點は實行に在り

上來論じ來りたる吾國現時教界不振の病根と社會上宗教修養の缺乏とを以て彼の歐洲に於ける教會經營及宗教教育の整頓せるに比較せよ、勿論吾國宗教界には特別の長所あり、歐洲の宗教界も弊害亦多々あるべしと雖、大體實行の點に於て

我の彼に後れたること甚だし、然らば如何にして此大問題を解決せむか、是れ讀者諸君の知らむとせらるゝの點なるべく、吾人も最も眞面目に讀者諸君と共に講ぜむとする所也。

我國人の彼の宗教界を一瞥するや、我と彼との相違は非常なるが爲めに反對なる二種の極端説に陥り安し、一は彼國に於ては、しかく完全に發達せりと雖、是古代より歴史的にかなりたるが故に然のみ、決して現時我國に於ては企て及ぶ可からざるものとして全然之を放棄して顧みざるもの是也。一は我國か他の法律制度を適用したるが如く直譯的に直に彼か條令の儘を用ゐ、一氣呵成、法文を以て宗教界を律せんとするもの也、而して此兩者の見解何れも正鵠を得ず、前者は自暴自棄の極にして後者は氣早なる皮相論者也、抑々各國の宗教經營なるものは歴史あり、順序あり、其教理と密接の關係を有せるものあり、其國民性と離る可からざる連絡あり、仔細に之を調査するに一として意味を有せざるものなし、故に之を以て我國の模範として我國の教界經營に資せば其得る所實に大也、然れども其精神を擧取し、其要點を得る事を要す、吾人初めて彼教會の實狀をみて殆むと望洋の嘆ありき、一旦其緒を得るに及びて佛教者として又我國民として如何に實行すべきや、着々として其解決の道を得自己の所信を認め得たり、みよ、所謂彼が歴史なるものは即實行の結果にあらざや、彼が教會なるもの亦是彼が經營の結果にあらざや、彼

適切眞摯なる實行

然らば如何にして局面を開展し、如何にして實行に着手すべきか、曰く他なし、宗派の如何を問はず、教界の内外を論ぜず、すべて、社會と宗教との間に空氣の疏通を謀り、宗教は社會上の感化を目的として眞摯なる實行をなし、社會は宗教的修養を重ねて宗教的經營に力を致すべし、而して此氣運

を促し来るには適切な施設なかるべからず、而して吾人は
 實行上に於て幾多の考察を有すと雖、徒らに空言を弄するを
 好まざるを以て、教界の方面に於て現時實行し得べきもの二
 件を挙げむ、即ち第一は各宗各派の内部の一大改良にして第
 二社會の宗教的修養也

前者は宗教界を他の社會の如く社會の健全なる分子を吸収
 し得べき組織とし、且つ此等の健全なる分子を教育すべき完
 全なる機關を整頓する事也、是教界不振の根本的病根を去除
 するものにして、若し此の事業にして成功したらむには、宗教
 問題解決の一半を終へたるものと謂ふべし、こは他日編を改
 めて詳論することとし、現時直接に着手し得べきことは、佛
 教各宗派の教育機關たる大學若くは中學校なるものを開放し
 て、社會の健全にして而も宗教に適したる人物を吸収する事
 を勉むべし、此事小なるが如しと雖、多年空氣沈滞せる教界
 に向て一條の血路を開きて新生面を開くを得べし、

後者即ち社會の宗教的教育に至りては、現時最も必要なる
 ものなり、而して之を實行するや、先づ小學時代の兒童より
 舉めざるべからず、現時我國の教育界に向て、小學に於ける直
 接の課目として宗教教育を要求するは或は困難の事情あるべ
 し、然れども各日曜に於て各寺院に於て其村落若くは其の所
 屬信徒の兒童を集め、適當なる宗教教育を施すことは頗る容
 易なる事業にして、宗教家が正さに勉むべきの好事業にあら

ずや、曩きに吾人か歐洲の實例に於て列記するところのもの
 は、我國佛教僧侶は亦其寺院に於て實行し得るの便あるにあ
 らずや、夫れ、心靈の開拓は人物の品性を涵養し徳器を成就
 するの根本也、若し兒童幼年の時期に於て修養宜しきを得ば
 是社會を其根柢に於て清淨ならしむる方法也、而して從來佛
 教者の教育方法頗る不秩序なるが故に、勞力に比して結果頗
 る少し、故に今後は一定の教課書を作り、數年間に於て佛教
 の要義を授け得べき適當の計畫を設け、兒童をして反覆暗誦
 せしめ、頭腦に銘記せしむべし、且つ時として適當なる中央
 機關を作り、各地僧侶を集めて教授を講習せしめ、又特に出
 版物を作りて全國の連絡を通せしむ可き也、吾人は切に各地
 の僧侶諸氏の之を眞面目之を實行せられむ事を望むもの也
 中學已上高等學校及び大學に於ては青年會の組織を以て宗教
 教育の目的を達せられむことを切望せざるを得ず、現時各地
 既に青年會の設けありて、漸次發達の傾向あるは大に喜ぶべ
 き現象也、吾人は今後着々として其機關を整頓し、範圍を擴
 張し、特に信仰の猛火を呼び來りて、青年の氣風を刷新し、
 嚴格なる道徳を實行せられむことを切望に堪へざるなり、若し
 其れ詳細の施設に至りては他日之を講ずる事を得む。

佛教と南方亞細亞

柏原 文太郎

現今の所謂海外布教なるもの、必要ありや否やは、暫く別
 問題として、海外布教は佛教者に取りて必須の事業なりとせ
 ば、其布教方法の如何によりて多大の影響を被るや、明瞭な
 る事實なり

我國佛教者の海外布教を企るや、遠く十數年前にありと雖
 も、吾人の寡聞、未だ顯著なる事績の擧れるをきかず、偶々
 耳にするものは、彼等布教者の無學なる且つ素行の修らざ
 る爲め、屢々醜態をあらはし却りて世の耻辱を招ける事
 のみ、而も稱して海外布教と云ふ、斯の如くは百年の後と雖、
 其効果を見ること甚だ難しとせざるべからず

意ふに宗教の事たる、決して一小事を以て看過すべきにあ
 らず、彼北清事件の如き、その起れる原由は基督教の宣布即
 ち宗教の上に發したり、是を以て海外傳道の忽諾に付すべか
 らざるは、余が言を待たずして知るべし、從來我佛教者の海
 外布教と稱し、支那朝鮮に向て大法を宣布する状態を視るに、
 彼言語を知らず、人情を察せず、風俗習慣を審みせず、た
 ゝ人種を同くし、文字を同うするを以て海外布教容易なりと
 速するのみ、たゞ、彼と我と文字を同うすと雖も、布教
 者にして支那朝鮮の時文を能くするものに至りては眞に寥寥

乎たり、彼等の誤謬も亦憐むべき哉

元來、支那朝鮮の布教の實舉らざる所以のもの、布教者に
 布教の資格備はらざることは勿論なりと雖も、支那朝鮮の人
 民たる、殆と宗教的思想なく、從て、信念の薄弱なること此上
 もなし、如此人民に向て銳意熱心法を説き、教を布くも、到
 底馬耳東風たるを免れず、吾人はこゝに支那朝鮮の布教廢止
 論を唱道するものにあらざるも、此等に費す多くの時間と勞
 力とを割きて、南方亞細亞に向て布教傳道せられむことを勸
 告するものなり、先づ布教者は南亞に入りて言語、風俗、習慣、
 地勢を研究し、而して後徐ろに布教の方法を確立せらるべか
 らず、殊に南方亞細亞は佛教研究上、多くの資料を有するこ
 とは一般の認むる所にして、佛教者たるもの布教するも否と
 に拘らず、必ず足一たび其地に入らむことを望む

歐人は南方佛教を目して小乗教なりといふ、邦人も亦爾云
 ふ、然れども邦人の如き南方亞細亞に入りて實地踏査もせず
 して、直に小乗教なりと速断するが如きは、吾人の取らざる
 所なり、南方佛教は果して小乗教なるや否やは、局外の吾
 等の知る所にあらざれども、求法の僧にして支那より印度に
 渡りたるもの、古より越しとせず、此等の人は初めは天山の
 北、或は南をとりて陸路交通したりと雖も、海路の交通漸く
 開くるに従ひ、義淨三藏の如きは渡天の歸途海路を取りしこ
 と明なり、又後秦の智嚴、北燕の曇摩竭二僧相尋いて印度に

航したり、遠磨の如きも印度より海路廣州に來りたることは、史乘に明記する所なり、彼等の航海中南方亞細亞に上陸し、佛敎の經典敎義を傳へしことなしとも限るべからず、南方亞細亞を以て一概に小乗敎なりとして排斥し去るは、稍々忍びかたき所なり、余か短日の視察十分の證なきを以て、之を斷言するを得ずと雖、只こゝに疑問を提擧しおくのみ

佛敎地としての南亞は極めて研究の價値ある土地なり、僧風の清淨にして、人民の信仰堅牢なること支那、朝鮮若は我邦の遠く及ばざる所にして、國王の地位を以てするも、彼大僧正に對しては足下に拜跪せざるを得ず、中流以上の人民にありては、一たび必ず得度するを要す、帝室の儀式として佛敎に則らざるはなし、去れば佛敎は純然たる國敎にして、勢力の偉大なる洵に驚くべきものあり、人は小乗の徒として嘲るも、僧侶の道心堅固なる、婦人を近けず、金錢を手にせず、嚴として戒律を守り、秋毫も犯すことなし、此を以て人民の僧侶を尊崇すること我の比ならむや

南方亞細亞は布敎地として、最も適切なるはいふ迄もなく、佛敎研究の資料に於て又好箇の地たるを失はず、歐人の佛敎研究の資料は主として南方亞細亞にあり、彼基督敎徒は盛に布敎傳道をなしつゝ、頻に佛敎の材料を蒐集し、時に或は重大なる疑問を提げ來りて、鼎の輕重を問ふことあるも、北方佛敎者は歐人の學說より破る非難を説くに苦む所以は南方

佛敎の状態を詳悉せざるに由る、南方佛敎の研究は、原始佛敎の研究に必要なると共に、歐米に於ける佛敎の疑義を解説し、併せて佛敎々義を高めしむるのみならず、北方佛敎の缺點を補ふに於て、蓋し重要問題なり

而して之か研究の方法は、先づ南亞の社會並に歴史を探究せざるべからず、之を探らむと欲せば佛敎者は南方亞細亞即ち暹羅、緬甸等に進入し、直接に南亞の文物風俗に接觸するを要す、然らざれば其真相を窺ひ知ること能はざる也、最も渡航者は品行の正しきもの、語學の素養あるものを選ばざるべからず、從來の海外布敎者の如きは、日本佛敎者の体面を汚すものにして、佛敎研究の重任を負はしむるに足らず

大乘の徒を以て任する我佛敎者の内部の腐敗汚行は今や殆ど其頂點に達せむとする状態なり、之を救済するに於て幾多の策あるべしと雖も、余は先づ南方佛敎者を招致し、彼我相接觸し、互に提携し且つ交通するに至らば、外部の刺戟によりて豈多少の効なしとせむや、よし内部の腐敗墮落を救済するに至らざるも、南方佛敎と北方佛敎と互に連絡の線を描くを得ば、佛敎研究の資料に裨益を與ふるは吾人の信じて疑はざる所也。

本月十六日愈伯林を發しドレスデンに止まること四日、觀華りて二十日朝當地に着當地の美術館を見物しドレスデンにてはオハルをも見物致候、ミュンヘンの風物又伯林と趣を異にするものあり、去れども連日ドレスデンの風雅なるに及ばざること遺し思ふ如何(四月二十日ミュンヘンにて松本文三郎)

社 會

動物虐待防止會

人道の問題、教育上の問題、法律上の問題、衛生上、經濟上、農政上、はた、審美上の問題として此會を起さる、吾人宗教上の問題として大に賛成するもの也。古代佛敎の信念活きつゝありし時は、此種の實行は自然に行はれたり、何んとなれば、哀々の情は其苦痛をみるに忍びざればなり、吾人之を奈真朝時代の政令にみる、後代信念乾燥し了して、單に一片の敎理としてみるもの多し、是れ邦人が理想にのみ力を用ゐて、實際に重きを置かざるの結果也。西人理想遠く邦人に及ばざるも實際に長ず、是れ、動物に對する世界觀の低き基督敎なるにも拘はらず、人道の考より、既に此會の創立を歐米に見る所以也。而して今や多數の有志により亦之を我國に創立せらる、洵に美事也。吾人切に之が永續實行を欲するが故に、注意二則を呈す、一、邦人の寛大なる性質は、他の惡に對して制裁を加ふる力に乏し、爲に虐待を目撃し乍ら防止を敢てせざるが如き事勿れ、二、邦人極端より極端に走る弊あり、爲に初めは瑣末の點まで絶對的に厲行せんとし、厲行し得ざれば、爲し能はずとして放棄するが如きこと勿れ。

夏期巡回講義

大日本佛敎青年會により本年より行はる、地方は九州、北越、東北、なり、從來中央と地方との間の連絡親密ならむことを欲したりしが、今や此適切なる方法によりて愈實現せられたり、現時社會の腐敗を救はむと欲せば、根本的に健全なる新分子を以て廓清せざるべからず、實に青年は第二の國民なり、既に團體あるものは、益々其組織を鞏固にし、團體なきものは此際新設して、品性の涵養と秩序的宗教修養の端緒を開くべし。

慈善旅行

時事新報社の行ふ所なり、平素裏棚にのみ日暮しせる兒童の初めて旅行して、新しき見聞を得ること多からむ、後年兒童一身の歴史に於ける著しき出來事たるべし、幸に監督者は成るべく其遊ぶ所の山川城市に關係せる、歴史的地理的談話をなして各兒童の記憶に残るべき愉快なる印象を與ふる如きは、蓋し一生忘るべからざる精神的慈善なるべし、吾人は此の如き健全なる慈善の益々行はれむことを望む。

淨土宗の近時

同宗社會的活動大に見るべきものあり、文學院を設立し、中學敎員を養成すと、是最も適切なる施設也、從來佛敎者の教育、學問を主として信仰を後にす、龍を畫きて睛を點せざるの憾あり、同院の如き最も此點に重きを措かれむことを望む、紀念傳道、國民禁酒同盟會、吾人は切に其繼續を祈る。

海 外 時 事

神學自由討論

●プロイセンの貴族院 去る五月七日同國貴族院で、教務所の豫算を議する時、端なく神學自由討論が持上つて一場の論戰が開かれた、發言者兩者の議論頗る聞くに足るものがあるから、今之を大略描いてみよう、此問題の提出者は

フチン、ドゥーラント男爵である、曰く、現今多くの神學の講師は自由討論を唱道して宗教の存在を危機に陥らしめて居る、信仰の厚き兩親の手によりて育てられた人、大學に來て神學を學ばせしめて神學者の講義をきき、今迄の信仰の動搖して種々の疑問を惹き起し、教團の上に多くの影響を及ぼすことである、神學の講師は其生徒より堅き地盤を築き、其の爲めに如何なる不幸を生じて來るかも知れぬ、之に付ては十分に責任を負はねばならぬ、云へば人は學問の討論自由を云ふことを以て反對するであらふ、私どももより學問の自由討論を否認しませぬ、然れども學問の討論には自ら區別の存するもので、凡ての學問に於ては全く不明の問題を討論するものである、併し基督の宗教は神の啓示を以て基礎とする故に、無制限に自己を主として考へることは基督の敵である、かゝる教を代表してゐるものはキリスト信者には屬して居らぬ、從て彼等は講師の椅子に止るべきは出來ない、そして近時の神學は此點に於て甚だ危機に迫つて居る、政府は年少の學生を此危機より救ふことを計らねばならぬ、と論結した、之に對して

教務大臣ドクトル、ストロッド、フランドルはこう云ふことをいふた、此の議論に付ては私は教育行政の立場から一般に注意したいと思ふ、吾々は大學にては神學の色々の方面に於て、空氣と光りとの委いではならないといふ原則を堅持して居るものである、此事は我新教々會の利益なるもので新教々會は凡ての誤りを自分自ら排除し去るの力を有するものである、此立場は既に前任者の取つた方針である、私ハボン大學の舊約全書に關する神學の講座を此大學の希望に反して任命した時に非常に攻撃されたるは諸君も御承知であらふ、他の一方では私は兎角自由派の方向に近くといふ批難あれども、私は之によりて私の選た方針は誤りでないといふ結論が出来る、私は新教々會に於て諸種の方向の競争に於て、優勝劣敗自然に淘汰が行はるゝこと、確信します、云々、教務大臣の演説は論旨曖昧である、けれども自由討論派と見て差支ないから、次に

視 察

基督教外國傳道の發達

池山 榮吉

世界交通の時代は世界傳道の時代となつた、『爾曹ゆきて萬の民に教へよ、而して父と子と聖靈の名に於て彼等を洗禮よ』との基督最後の命令は、今や將に現實にせられんとしつゝある

試みに基督教傳道地圖を開いて見れば、歐洲及び北米の西部を除いては、他は皆大体に於て所謂「ハインデン即異教徒地方」であるが、到る處傳道署の設があつて、夫の太平洋上赤道附近に散在する無数の島嶼や、北はグリーンランド、南はニューシオランドの如き、寧ろ基督教地方たる觀を呈してゐる渾圓球上苟も交通の便あるところにして、基督教傳道師の至らぬ隈は殆んどないのみならず、彼等の熱心なる、道なきところを道を開いて進むの概がある、傳道師にして地理的發見を爲したるもの尠からざるは之が爲めで、實に彼等の足跡は萬國郵便聯合の範圍よりも廣い

抑々基督教が今日より見て以て異教徒地方とする方面に傳道されるに至つたのは、何時頃からのとてまた現に何の位の程度でやつて居るものであるか、今之を説明するに當り、先

ハレーの大教教授ドクトル、レーニンゲ曰く、私は學理的に説明しようと思はぬ、併しなから今大教教授に對して起されたる重き批難に對して、一言辨しておきたいと思ふ、私は凡ての宗教的考に對して最も偉大なる尊敬を有してゐる、そして私は人の他の信念を尊敬することを希望します、自由討論といふ事は、吾々神學者も否きを問はず、吾々は維持しねばならぬ權利である、私は新教の教會の地盤の上に立てゐるものなれども、私の仲間殊に神科大學の教授には自由討論の研究がなければならぬ、私は神學に付て一の制限あることを知る、うして基督教の地盤に立ちてゐないものは、神學の教授として止まるべき出來ない事を知る、若し吾々が神學を狭き眼界に於て制限するならば、それは全世界の新教神學に於て第一位を占めぬ獨逸新教神學は自殺を意味するものである、

十六世紀以來獨逸の神學界に於て有名な大家は皆自由討論を以て原則として居つた、私は基督教の地盤に立て居らぬ神學者は一人もない事と思ふ、彼の信條の如きは人間の誇りたものである、從て聖書の上に立つては、一體學問に討論によりて漸々眞理に近く事が出来る、私はプロイセン王室の自由討論の保護者であつた事を忘れない、私はハレー大學の二百年に於て皇帝の語された御言葉と思ひ出して感概に堪えない、即ちハレーは常に自由なる學問の旗の翻つた大學であるといふ御言葉である、此事はハレー大學計でなく凡ての獨逸の神科大學にはなく傳はるべき共に、學問の自由を制限せむとする事行はれざるを信するものである、云々、此は明晰にいさも臆面なく自由討論を主張したものである、之に對して

フチン、ドゥーラントは再び起て簡單に辨明したが、別に記する程の議論でないから、次に

大視教ドクトル、ドレイヤーの説を紹介しよう、只今ドゥーラント男爵より提起された主義上重要な問題に付て、私は我新教々會の信徒として又大視教として大なる利害を有するものである、私は男爵と同じく或神學者は全く其方向を誤りて二の新教信者として信念を要求することの出來ない悲境に陥りておることを知りておる、此問題は其影響する所頗大にして、元より本院に於て討論解決し得ることには思はれない、又此問題は行政上の處分に關係するものでもない、思ふに宗教改革は學問の自由より起る、學問の自由がなかつたならば、宗教改革は聲なき語である、吾々は自由の學問に教會生存の一要件であることを忘れてはならぬ、若し學問の自由が新教々會に或結果を生ずるに對して新教教會が、或方法を講じなければならぬ場合に立ち入る時は、それは本院の關する處ではない、之は大教院の任務であらうと思ふ、私は政府が注意して凡ての大學に於て種々の方向を調和せしめ、自然眞理の道に到達せられん事を望むものである、云々、これもあまり明瞭でないけれども、自由討論の側に傾いてゐるは明白である、以て彼等が神學に對する自由思想の如何に盛んであるかを知るに足る

づ簡單に基督教の當初に於ける傳道の順序からはじめやうと思ふ

基督教が段々と全世界に弘まつた順序から見ると、其の傳道の發達は大体四つの時期に別かれて居る、其の第一は所謂使徒時代より中世迄、第二は中世、第三は近世、第四は即第十九世紀以來である

第一期(使徒時代より中世まで)

第一期は基督教が羅馬帝國全体に弘まつた時代である、此時代に於て傳道家として最も大なるものは異教徒の使徒と稱せられるパウロで、彼が如何に異教徒傳道に盡瘁したかは新約全書の使徒行傳に明かである、彼は前後數回の大旅行をしてエルザレムより小亞細亞希臘を経て羅馬の方迄教を弘めに行た、一説に依れば西班牙の方迄入込んだといふとである、其の外の使徒は主として猶太人の間に傳道したものであつた、ベトロはバヒロン迄トーマスは印度の方迄も行たのである、兎に角第一世紀の終頃には地中海に接して居る諸州には幾多の基督教團が成立して、信徒の数は二十萬を超え程になつた、基督教徒に對する殘酷なる迫害は却て傳教の媒となり、第四世紀の初コンスタンチン皇帝が、初めて基督教に對して信教の自由を許した頃には、亞細亞、亞非利加、歐羅巴の三大州に跨る遠大なる羅馬帝國の領域を通じて、信徒の數既に六百萬に達してゐた、六百萬といふ數は當時帝國の人

口に割當つれば二十分の一に過ぎなかつたが、基督教が一轉して國教となるに及んでは百年を出でずして、帝國全体は殆んど基督教化してしまつて、第五世紀の終頃には異教徒は極僻遠の地方に曉の星の如くちらほら散在してゐるのみであつた、夫のハイデン(田舎漢の義)といふ言は即これから起つたのである、併し帝國の領域を一步踏出せば何處も皆ハイデンの巢窟ばかりで、之を基督教化するといふとが、中世即第二期に於ける傳道の任務となつた、

第一期(中世)

第二期は基督教が歐洲全体に擴まつた時代で、之が爲には凡八百を要した、當時の異教徒傳道の道行を見ると、先づ羅馬から佛蘭西、それから英吉利に向ひ、次に佛蘭西、英吉利の方から獨逸に傳はり、それから此度は佛蘭西獨逸から、丁抹、瑞典、那威の方迄進んで更に獨逸、瑞典の方から芬蘭、ポーレンの方へ及ぼして行た、スラヴ民族に對しては東羅馬帝國(コンスタンチノール)の方から始めはブルガリヤ、メーレンの方へそれからベーメン、ウルガルン露西亞の方へ傳つて行た

此時代の大神道家として最も有名なのは、獨逸人の使徒といはれるウインフリード即ポニファチウスで夫の聖オーガスチンも五百九十七年に時の法王グレゴールから英吉利の方へ差遣せられて大に傳道に盡力した、前期に於ける傳道は初

それは即モハメット教の侵入で、之が爲め基督教は從來己の教域となつてゐた亞細亞(六百三十三年乃至五十二年)亞弗利加(七百七年)の大部を奪はれたのみならず、終に西班牙(七百一十一年)迄も喰込まれた、夫の十字軍は之が回復を企圖して遂に成功せずしなつたものである、併し第十三四世紀の頃にはとうとう歐羅巴全体が悉く基督教の教域となつたので、近世即第三期に於ては愈々歐羅巴以外に於てハイデン傳道の試みられることゝなつた

第二期(近世)

前期に於ても歐羅巴以前の傳道は絶えてなかつたのではない、第十三世紀の頃から蒙古及亞弗利加に對して傳道の試みられたことがあつた、孰れも永續の効果を収めたることは出来なかつたが、兎に角これは今日の異教地方に於ける傳道の魁をなしたものである、蒙古人に對する傳道はデンギスカンの時代から端緒を開いてデンギスカンの後裔と羅馬との間には屢々宗教に關する使者の往復があつた、併し繼續的の傳道事業は第十三世紀の終に當てフランチスカオルデンの僧ホルツノーに由て開始された、彼は單身北京に至り幾もなく二つの教堂を建て六千の蒙古人を洗禮し、新約全書を蒙古語に反譯し、十餘年の間たつた一人で働いて居つた、其後段々と教務の多くなるに従て本國の方から追々仲間の僧が助けに来る様になつて、千三百七十七年には法王クレメンス第五世は彼を北

は使徒に由てなされたが、次で使徒に由て構成された、教團がよく其精神を受繼いで傳道を以て他事と見ず一方には所謂エアンゲリストなる傳道を専務とせる者の有力なる後援となり、他方にはまた自ら人を派して教を弘めしめた、また信徒にして商業植民戰爭乃至迫害に依て四方に旅行し移住し遠征し離散したるものは皆自ら直接間接に其信仰を傳へてゐた、かかるに第二期となつては所謂オルデン(世間を離れ清貧、順の三戒を恪守して専心神に事へんとする者の團結)といふものが發達して來て是が主たる傳道の機關となつた夫のポニファチウス、オーガスチンの如きも矢張オルデンの僧であつた、それから此時代の傳道は其方法に於て、初めは使徒時代のど大差なく、主として信仰の力に依つて行たが、後には政治と提携して行くことゝなつたので、屢々掠奪の劍と共に進むといふ奇態を演ずるに至つた、其結果傳道は大に俗了して屢々一地方を擧げて何千といふ人数を一時に洗禮することもある、傳道と洗禮とは全く混同視され精神の感化奈何は毫も問はれない様なことになつてしまつた、尤も獨逸人などは宗教の撰擇を個人の問題と看す當該民族全体の事件と見たので自然この「群衆洗禮」を惹起したともあるが、兎に角傳道が表面的形式的のものとなつたことは疑もない

基督教は此間に於て着々廣大なる新教域を開いて行たが、第七世紀の半頃から此傳道上非常の打撃を蒙つたことがある、京の大教監に任じた、彼の死後も年々教堂の數が増して行たが明朝の興るに及んで悉く放逐されて全く種を絶やされてしまつた亞弗利加の方へはフランチスカオルデンとドミニカオルデンとで傳道を試みた、幾多のオルデン僧は非常の熱心を以て傳道に従事し、夫の聖フランチスカス自身も一時之に與つたともあるが、徒に殉教の血を流すに止まつて何等の效を見るときもなかつた

近世に至て歐羅巴以外に於ける傳道の大動機となつたものが二つある、其一新大陸の發見で其二は即宗教改革である、宗教改革に因て歐羅巴に於ける廣大の教域を失つた加特力教會は、一方に所謂反對宗教改革の運動を爲すと同時に、更に海外に傳道して大に新教域を開發するを企てた

當時亞米利加の西班牙領に於て最も熱心に傳道したのは、カーサスといふオルデン僧で、彼は其の本國人が土人を非常に虐待するのを憤慨して、印度人傳道に力を盡す傍之が教濟に狂奔し、前後七回西班牙に旅行して遂に千五百七十七年カル第五世をして土人の人身自由を認めしめた、それから葡萄牙領の亞米利加即今日のブラシルの方へは當時の國王ヨハン第三世が一隊のエズイットオルデンを派遣して傳道せしめた、而して彼等は云ふべからざる危険と困難を犯して食人各種の間に立入つて、とうとう之を基督教徒たらしめた、當時彼等傳道に従事せるオルデン僧の献身的精神と其の經營の力

とは誠に驚くべきもので、夫のエズイットが西班牙政府の允許を経て南米バラカイの大森林に於て十萬の土人を率ゐて傳道植民地を開き千六百年より千七百五十年に至る百四十年の間、一種の獨立國を打建て、居たといふ如きは、實に傳道史上の大奇談である

東洋方面に於ける傳道家として最も有名なのは、印度人の使徒といはれるサヴィエーで彼は千五百四十二年教主の使者として他の二人のエズイットと共に印度に來り、燃ゆるが如き熱心を以て傳道に従事し、僅の間に數萬の人を洗禮し、後更に日本に渡りそれよりまた支那に赴かんとして其途中に於て死んだ、彼の事業は爾後エズイットが引繼いで東印度に於ては千五百六十五年頃既に三十萬の信徒を數ふるやうになつた、日本では千五百八十一年頃二百以上の教堂と十五萬の基督教徒があつて、千六百年の頃には其數六十萬に達したといふのである

支那には是も矢張エズイットのリッキョーといふ僧が傳道した、彼は先づ自分の身を全然支那的に化して數學天文の講義の中に教理を交へて説き且基督教は孔子の教を新にしたものであると説明した、而して洗禮に必要な條件としては單に一神を承認するといふ十戒を守るといふにと止めた、かゝる狡猾なる方法を以て傳道したので彼は大に上下の信用を博して非常の好結果を収めた、千六百年彼の死ぬ頃には全國で幾

百の教堂が建てられてゐたが、千七百年頃には當時のオルデンの記録に依ると八十萬の信徒があつたといふとである、此期に於て加特力の傳道に關して特に注目すべきことは、法王グレゴール第十五世が千六百二十二年に羅馬政府の中に中央傳道局を設けたとで、爾來加特力の傳道は總て之に依つて統一されてゐる、今一つは法王ウルバン第八世が千六百二十七年に嘗てロヨラの設けた獨逸傳道學院の制に倣つて、非常に大仕掛の傳道學院を設けたとで、此學院は其生徒を可成當該傳道國人から採用する仕組になつて居るので、今日に至る迄加特力の傳道力養成の中心となつて居る

新教の方では宗教改革の起つて以來凡二世紀の間は殆んど傳道といふとは行はれなかつた、エラスムス、クロンウエル、ライベニツツの如き之を論じ之を計畫したものはあつたが、孰れも實効を収めるに至らなかつた、其原因は第一新教の方では其始め對加特力策に全力を傾注する必要があつたので、なか／＼海外傳道の方まで手を延ばす餘裕がなかつたので、二つには當時海上を支配して居たものは皆舊教國であつたのである、されば新教の基礎が漸く固くなり、且新教國にして海上の權力を有するものが出來て來て、それから丁度夫の實信主義が興るに及んで、こゝに初めて海外傳道が行はれるやうになつた

和蘭は第十七世紀の始葡萄牙から東印度の植民地を讓受け

たので、此處に傳道の行はるとなつたが其方法は極表面的であつた、公職に就くには先づ洗禮を受けて白耳義教會の信條に署名するを必要としたので、多くの者は此條件を満たして名義上基督教徒となつたが其信仰は依然舊のまゝであつた、第十七世紀には英人が續々移住したが、其中で夫のフニリタン派に屬するものは、印度人に對して大に熱心に傳道を試みた、印度人使徒の名あるエリオットは半世紀の間此事に盡瘁して聖書を土語に譯し、十七の布教所を設けたととである、新教の方で眞の組織的海外傳道の嚆矢は所謂「丁抹ハレー傳道」でこれは第十八世紀の初丁抹の國王フリードリヒ第四世がハレーのフランクの監督の下に主として自分の領地の方に傳道させたもので、東印度から西印度亞弗利加の西北海岸グリーンランドの方迄も行はれたそれから千七百三十二年からはチンツェンドルフ伯の率ゆる「兄弟教團」が大に海外傳道を企圖して西印度グリーンランド北米印度人南米土人亞弗利加南部のホッテントッテン人、ラプテールのエスキモ人等其他野蠻未開の諸地方に傳道するに至つた

斯の如く第十七世紀より十八世紀にかけては、新舊兩教の海外傳道は屢々として進捗すべき趨勢であつたが、第十八世紀より第十九世紀の初にかけて行はれたる正理主義とオルデン征伐とは大に其發達を阻害したのみならず、從來の成績を或は萎靡せしめ或は全く水泡に歸せしめた、夫の丁抹ハレー

傳道の如きも此事に於て消滅した、殊に千七百七十三年の「エズイットオルデン」の廢止は加特力海外傳道の上に一大頓挫を來せしめた、爾餘のオルデンも迫害に因つて概して舊來の勢力の過半を失ふた、其結果は延いて傳道の上に及ぼした

然るに第十八世紀の末から十九世紀にかけて、新實信主義の復興に因つて開かれたる所謂信仰覺醒の機運は、夫の亞弗利加黑人の使徒といはれるリヴィングストーンやクック等に依つて爲されたる地理的發見と諸種の交通機關の發明と相俟つて、こゝに再び海外傳道發展の時代を促成して終に今日の盛を來すやうになつた

第四期(最近世)

第十九世紀に於ける新教傳道の發達は誠に目覺しいもので、此世紀中に新設された傳道會社は凡百五十程ある、即現存の傳道會社中僅に五六を除けば他は皆第十九世紀中に形成されたものである、今之を國別に見ると先づ英國には四十程ある、中に就き最も著しいものを舉げれば教會傳道會社は五百五十人の傳道師、二十七萬の異教信徒(もと異教徒にして現に基督教徒たるもの)三百萬圓の收入を持つて居る、宣教會社は三百の傳道師十五萬の異教信徒百二十五萬圓の歳入を持つて居る、それから龍動傳道會社は百九十の傳道師二十五萬の異教信徒百二十五萬圓の歳入、パプチスト傳道會社は百六十の傳道師十二萬五千の異教信徒七十五萬圓の歳入、ウェス

九十一年には七十萬人に達した、それから支那に於ては千八百五十七年には二十千人しかなかつたのが、六十七年には一萬四千七百人、七十七年には三萬九千人、八十七年には七萬人、九十七年には十七萬人、九十九年には二十萬人となつた。之を要するに第十九世紀に於ける基督教外國傳道の發達は實に凄じい勢であつた、所謂異教徒の數十億を以て數ふる中に在りて、舊教徒の數一千萬を踏ないとすれば未だ多いとはいへないが、之を前世紀に於ける趨勢に鑑みれば百年の後には果して何ういふ比例になるか豫め測りしることが出来ない、恰も一旦蒔いた種が第十九世紀以前にはいつも芽を出されてしまつたのが、今度は十分に根を張つてやう／＼芽を出されて來て、今ではもう大概の風雨では倒れる氣遣のないやうになつた者がある、實に第十九世紀は基督教傳道史上一大新紀元を爲したものであるが、其傳道の遣り方は當然の順序として先づ廣く淺くわたるのを主とした様に見へるが、あつたに第二世紀の傳道は必や深く細くやることに重きを置くことゝなるであらふ、吾人佛教者は之に對して十分の覺悟をせねばならぬことである。(完)

日曜講話
 毎日曜午前九時より
 本郷區森川町一帯地
 二百四十號に開く。

信 界
 讀經餘瀝

近角 常 觀

諸君に御別れ申してより既に二年、今日此欄に再び御目にかゝるを得たは、實に言ふに言はれぬ感慨である、何より先きに聞て戴きたい事は、私か此二年間に經文より偉大なる感化を被り、一文一句に生氣を感ずる様になり、細々乍ら今では我信仰を修養する唯一の生命となつた次第柄である。

一昨三十三年の四月十三日横濱を解纜して日本の山は遠く夕日の影に見えなくなつた已後、十八日間引續き茫々たる大洋と眠々たる落機山を漁船、漁車で走りつゝある時、朝夕床上に孤坐して身に帯びて來た聊かな我有縁の經文及聖教を拜誦して、心ばかりの拜禮をした、此時既に外界の境遇と萬里の旅情とは同じ經文であり乍ら、平素に異りて、深く腦中に浸み渡る心地がした偕て米、英、兩國に於て常に耶穌教教會の遣り方を視察し、其バイブルを貴び味ふことの緻密なると、如何にも難有相なるを見て坐るに羨くなつた、又大學にて之を研究するには希臘、羅馬は勿論、希伯來等の原文から始めて、語學上より活かして讀むで居る、私は之をみて益々感心した、倫敦に居たときエチユア、ロードと云ふ町

の古本屋に立寄つたら、マックスミユラー氏の傳記論集かあつたから、買ふて歸て讀むだ所、豈圖らむや、南條、笠原兩師の傳がありて、二十五年前に渡英して勉強せられたる苦辛か歴々として見へる、何やら面り、邂逅した心地して慕はしく讀んでゆく中に、南條師の自傳に下の如く書てある、「一千八百七十九年の暮、私はマックスミユラー教授に、日本より送り來れる小樂有莊嚴經(阿彌陀經)原文の謄寫を持參したるに、教授の方よりも、ポイドレアン圖書館所屬の大樂有莊嚴經(無量壽經)原文の梵本を示された、此發見は言ひ顯はすべからざる喜であつた、嘗に私と笠原の喜ばかりではなく、支那と日本に於ける淨土派の僧侶と俗人の喜である、私と笠原は原本を謄寫し、四の他の梵本と核合した、此仕事の結果が牛津紀要アリヤン部類第一卷第二部に於て私とマックスミユラー教授の大經小經の出版である」と、私は日本で此本を所持して居たゆゑ、一入感が深かつた、二十五年前に現に此國に來りて、此の様な苦勞をせられたかと思ふて燈下に暗涙を拭ふた、實に六月三十日夜のことであつた、して、此苦勞の結果が今に世に顯はれず、我々の信仰を養ふ爲めになつて居らぬは、頗る残念であるかと考へた、私は本文批評とか、歴史研究とか云ふ學問や、理窟の點て云ふのではない、唯信仰の點である、我々が現在の歐米の事すら譯文でよむと原文で讀むと、又想像して居ると實地を見たのと大きな相違が

ある、况んや經文の如き、其原文には必ず生氣躍如として、釋尊の説法に近接する思がするに相違ない、此本の出版された當時、英國の新聞に恰も昔、エラスムスカケンブリッジで新約全書の希臘原文を得たのと比較した相であるが、我々佛教徒に對しては、確かに其已上の價値がある、同七月牛津に行きてマックスミユラー博士に面會を得たとき、童顏鶴髮温平たる風采で、諄々として言はるゝには日本人民は佛教に新しき光りを與へねばならぬ、全体私は何歳にみゆる、實に七十七歳であるが、猶此の如く矍鑠として健康である、諸君は皆かくの如く倦まず勉強せねばならぬと、されど此時既に氏は病中であつたが左程とは思はなかつたが其後十月の末私が伯林に着した時、恰も氏の訃音が傳はりて、大に驚いた。

八月佛國で舊教を視察して居る頃より、耶穌教の慈善事業、社會事業なるものと、耶穌の傳中にある、行爲奇蹟と大に關係ある事を覺知した、耶穌が一つのパンを澤山にして人に施したとか、又盲をして目を開かしめ、跛をして起たしめたなど、隨分信じ難き事柄ではあるが、彼信者は其耶穌の愛を永久に持續して、今に澤山にパンを作りて貧民に與へ、又盲、跛、痲痺等夫々に對する慈善事業が起つたものであると考へ初めた、此に於て西人が驚くべき實際力を有することを知つた、もと／＼バイブルにある耶穌の奇蹟に對する信仰から、之を事實上に翻譯し來つた伎倆は非常なものである、佛教に

は教理を云へば大なる人道の上に築かれたる大慈悲の發現にして、事實としては釋尊を初め、古來高僧の歴史の上に偉大なる救済力が現はれてある、然れども現時の佛教徒は單に其を理想として味ふか、若くは加持とか祈禱とか神秘的の方法を用ゐるばかりで、救済の功力を社會上に事實的に顯現するの能力に乏しめるのは、頗る佛教徒の反省すべき點であると考へた、殊にミンヘンの新教教師オステルンタハ氏を訪問した時、小なる一室に襤褸の衣服を新らしく洗濯したのが澤山あつた、これは貧民で洗濯する暇のないものに爲てやるのであつた、私が之を一瞥した時に非常の感に打たれた、米國已來、大規模の慈善事業は澤山に見たが、左程に感ぜなかつたが、却て此舊教國のバイエルンの中で新教教師が自分の家で、片手間で遣つて居るのをみて、頗る感を深くした、定めて、貧民は非常なる救済を得ることであらうと思ふた、して佛教に於て此の如き救済はなきかと考へた、直ちに氣の附いたのは、大經第三十八の願である、即ち佛が清淨なる樂土を築く願を起し、其計畫の中に我國の人民は衣服を得むと念へば、念ふや否や、自然に身に備りて、裁縫したり、摺染たり洗濯する必要な様に仕度ひとある、實に適切感受すべき佛の慈悲である、而して是既に事實として實在せるものにして、我々佛陀の救済を被れるものは、既に此事實を享受すべき資格を授けられたのである、してみれば我々佛意に隨て行動するもの

は、此廣大なる佛の慈悲を成るべく社會上に傳へたいものである、否、眞實佛の慈悲に感激したるものなれば、勉めずして必ず自ら身に現はれ得べきである、此に至りて、しみじみ佛陀廣大なる救済を感ずること身に浸み渡りて、今迄は空に考へ夢の如く見做して居た事に氣が附いて大に慚愧の心を生じた、爾來經文を諷誦して、其感化を被る頗る偉大なるものにして、文々句々に含まれてある無限の救済を味ふ様になつた、たしかに佛の本願なるものは一々翻譯し來らば、盲目に對し、聖に對し、跋に對し、精神病者に對し、適切なる救済のみならず、未來に實在する佛陀清淨の樂土の全体が信者胸中の信仰を通じ來りて、其面影を社會の上に實現し、和樂なる家庭と平和なる國家とを形作る一大生命である、伯林着後同年の十一月旅中の疲勞と氣候の激變の爲、病を得て、アラグスタ病院に入り、友人の看護により三週間を経て健康舊に復した、窓外満目の秋色と海外萬里に於ける病床は、たしかに私に向て佛陀廣大の恩徳を感謝せしむる因縁を與へた、月の二十八日滿腔感謝の情に堪へ難く、床を出て、遙かに日本の方角に向ひ、默念遙拜、健全舊に倍する頭腦を以て大經を拜讀し始めた、言々句々に溢れたる佛陀哀々の大慈悲は、我が乾燥せる胸中を濕らし、覺へず、知らず、全身感涙に泣き咽んだ、佛陀が我々を救済せん爲めに、自己を忘れて實行し賜ひたる動作は、たしかに私の弱點を誠め私の墮

落を濟ひ私の罪惡を潔くし如何なる濁世をも清淨ならしめ、如何なる偽善をも感化すべき大眞實心の發現なることを感知した、歡喜胸に滿ち、渴仰肝に銘ずるとは實に適切なる形容である、實に大經一部は佛陀が我々に對する救済の事實と我々が佛陀に對する信仰の始終とを開設した、前後徹貫したる一大德音である、前に感ぜた通り、一文一句生きてあるが、其生きてある文句が集まりて、又全体として生きてある、言に出して言へば前に見た經文と今の經文と相違はないが、私の胸中には全く新たに活々として今更の如く感じて來た、有軀に自狀すれば、久しき已前より考へたには、佛教には澤山の經卷あれと、適切に信念の養ひに供すべきものがない、耶蘇教のバイブルの様なものがない、故に折もあらば諸經論中より修養に切なるものを拾ひ集めて自らも味ひ、人にも示したひと思ふたが、是は大なる誤であつたと云ふことを悟つた、全体經文なるものは佛陀救済の開説である、全体として大に意味がある、殊に此經文は佛陀救済の眞髓を示したものに於て、佛教の骨目、宗教の結局は此上に出づることないとい確信した然るに、我々如きものが之に向て取捨選擇を試みむと考へたは大なる誤であつた、今迄に信念の養に適切なるものがないなど考へたは實に經文に對する一大侮辱であつた、慚愧至極である、考へてみれば此經文は印度支那を通して偉大な救済を與へたものと見へて、既に印度にも諸種の原

文があり、支那にも十二通りも翻譯がある、殊に古來日本に於て此一巻の源泉より流れ出たる水は、如何に多くの人類を濕したか、鑽仰すべき極である、幸に現に五通りの支那譯も存し、前記梵本もあることなれば、歸朝の後は先輩の教をも仰ぎ先づ自分自身が反覆精讀生きたる御光を味ひ而して後了解し安き平易なる文字となし世人に示したひと誓つた次第であつた、爾後一年有餘、獨逸滯在中、胸中煩悶に堪へざる時、邪念の起りたる時、たしかに此經文によりて幾多の救済と安心を賜はりた、其他チエーリングンの旅行の時、歸路錫崙嶋ゴロンボに立寄りたるの時、幾多の所感があつたが、又此次に話す事としよふ。

航西已前に我か小さな胸中の經驗を書きて置きた靜觀録を、信仰の餘瀝と云ふ名の下に出版して貰て、諸君の清覽を辱ふしたるは望外の幸福であつた、一年半ぶりに筆を採りて、此欄に臨み、實に今昔の感に堪へないものがある、我か宗教的同朋諸君、私はかく在外中の所感を傾け、茲に有軀に陳述して諸君の胸裏に訴へる次第である、私は斷言する、私は多くの宗教を見、種々の書物を讀み、結局世界中最も完全なる宗教、最も感化を與ふる書物は、却て最も手近き所にあつた、私は切に諸君か此經文を訓讀して、潜める光を認め、自ら抱ける玉の價値を知られむことを勧めるのである私は之を以て端緒として、今後經文の意を味ひ、信仰感佩の餘に出でたる

敬虔の情を披瀝しやうと思ふ。

教 界 彙 報

◎大日本佛教青年會にては夏期講習會愈々来る七月十日より二週間美濃養老に開かるべく、また関西佛教青年會にては紀州和歌山に開催せむとして目下奔走中なる由

◎浄土宗第一回紀念傳道は、去る四月二十五日を以て終了を告げしが、更に来る七月を期し第二回紀念傳道を開始する由

◎本願寺派の佐賀佛教中學に於て紛擾起り、去る二日同林學生中熊本、大分、福岡三教區の生徒一同奮然袂を列れて退校したる由

◎大谷派にては來月一日より高倉大學寮に於て夏安居を開始し、浄土和讃、般若讚等を講ずさいふまた西本願寺にては七月廿日頃夏安居開始する由

◎眞宗與正寺派にては目下議會を開會し、宗制寺法の改正、豫算案等日々討論中なりといふ

◎佛教人名辭書は鷲尾氏多年の苦心にて編輯し、今漸く出来上りたるを以て、光臨館にて發賣する事とし豫約募集中なり

古 今

チンツェンドルフ伯 (上)

待 山 生

第十八世紀に於てメソヂスト教會の創立者たるジョンウエスレーと相駢んで教會史上の大立物たるチンツェンドルフ伯、彼は當時の思想の潮流にもまれ／＼て育てられ其中から一種獨特の理想を形つくりその幾分を實行したものである、彼は所謂兄弟教團の創立者で、實に宗教界に於ける大事業家である、而して其事業が純ら純粹の信仰からわき出たことは、彼

にとつて最も價値のあるところで、吾々は彼の生涯を觀察して幾多の教訓を得得ることが出来る

第十六世紀の未から、凡百年餘の間を、ルーテル教會に於て所謂正信主義の隆盛時代であつた、當時は純ら學理的に教理を研究することが行はれて、人々々空想に耽けることを樂んで、實際の奈何を問はない傾があつた、信仰の内容を分拆して一々之に明確の意義を附し之を秩序整然たる系統に組立て、智性から見てすこしも不都合のない様に仕上げるとが、當時の學者宗教家の仕事で、其弊たるや、全く學究的になつてしまつて、一方には自他教派間の異點にのみ注目して、共通の方面を見通してしまひ、互に罵詈譏を逞ふし、他の一方には純粹教理を表面的に了解するとのみを努めて、眞にそれが實地の生活の上に現はれる迄しみじみと心をさめることを等閑にする様になつた、そこで之に對して所謂無差別主義と實信主義といふものが起つた、前者は第十七世紀の中頃より主としてカリクスト父子に依て唱道せられたもので、要するに各教派を形式的に合同せずとも、最初の五世紀間に於ける基督教會の一致を以て、共通の地盤とし爾後に生じたる差異を重要ならざるものと看做し、聖書を先にし、神學を後にし、相互に忍容せねばならぬといふのである、此争は議論ばかり八ヶ間敷で、實際の上には何等の効能もなかつたので、漸く人心の厭いたところへ、第十七世紀の未頃、スベ

テル、フランケの徒が第十六世紀の宗教改革は、主として教理を純粹ならしむる一方に向いたので、改革の事業は未だ之を以て完成したものでない、われ／＼は更に之が補充として進んで其正しき教理に依て得たる信仰を基督教的の生活の上に現はすに努めなければならぬ、しかるに正信主義は少しも此事に頓着せぬのみならず、教理研究の點に於ても宗教改革者のとつた正しい道を履み外して、實のない文學的神學や、表面の正信的信仰を以て事としてゐるものであるから、今や前に引續て新宗教改革を爲すことが急務であると盛んに實信主義を唱へ出した、チンツェンドルフは此争議の最も激烈を極めた頃初て世の中の光を見たのである

彼の生れた年は千七百年、處はドレスデンで彼の洗禮親の中にはスベールも居た、彼の家庭は代々非常に信仰深い方であつて彼の生れた當時はスベールの感化で大に實信的になつて居た彼の父方の祖父は信仰の爲にわざ／＼埃國からザクセンに移住した人で、父はザクセンの大臣を務め母はゲルストルフ男爵家からきた人で夫婦とも至て篤い新教信者であつた、しかるに彼は不幸にも兩親と早くわかれねばならぬ運命を持って居た、父は彼の誕生後二月たゝぬまに此世を去つたので彼は母の里方の領地なるグロースヘンにもスドルフに引取られた而して彼の四歳のとき母は普魯西の或る將軍に再嫁して伯林へ行てしまひ、祖父は既に彼の二歳のときに亡く

なつたので、彼は全く祖母と叔母の手に依て育てられることゝなつた、ところが此二人がまた實信派の感化を受けた極の信者であつたから、彼は何時しかはや主に紹介されてまだ頭はない小兒でありながら朝夕の祈禱を何よりの樂としてゐた、燃ゆるが如き信仰を以て終始した、彼の一生は實に此時に於て其基礎を置いたものと見てよろしい、當時彼の信仰の如何に旺んたりしかは次の話を以てしてしる事が出来る、瑞典の王カール第十二世が露西亞ポーレンテ通過てザクセンに侵入したとき其部下の一隊の兵士が金品糧食を強請せんとてグロースヘンチスドルフの城内に亂入した、彼等はいきなり櫓子段を上て二階の一番高い室に入らふとしたところが、其室内には幾つとなく椅子がならんでゐて、一人の小兒が今しも其椅子を聽衆と見て説教してゐるところであつたが、どが／＼と彼等の入て來るのを見て今度は更に本當の人間に向て主の愛について説教をはしめた之をきいて兵士共は大に感に打たれて終には何の爲にこゝに來たのかを忘れてしまつたといふことで、これはチンツェンドルフが六歳の時の話である

彼の十歳のとき祖母は彼を信仰ある政治家としやうといふので、彼を連れてハレーに至りフランケの創立に係る羅甸學校に入學せしめた、此學校は今日まで盛んに繼續してゐる孤兒院の一部であつて、彼はこゝに寄宿してフランケの直接監督の下に實信主義の教育を受けることになつた、今迄慈愛深

き祖母の膝下に育た彼は急に殺風景の寄宿舎生活をするに
なつた初の程は仲間者からは馬鹿にされいじめられ、さな
きだに校規の極めて厳重なところへ祖母が彼をフランクに托
するに慢じないやうに厳しくして下さいと言ったこともあるの
で教員は特に彼を厳格に取扱へといひつけられてゐた位故彼
にとつて誠に辛い世つない時代であつた、彼はハレー在學の
間に於て實信主義の理想たる教會内に於ける小教會の必要を
深くも感じて既に十五歳のとき仲間有志者を集めて芥種會
といふ宗教的團體を起した、芥種會とは新約全書馬太傳第十
三章の三十一に「天國は芥種の如し人之を取て畑に播けば萬
の種よりは小けれども長ては他の草より大にして天空の鳥き
たり其枝にとまるほどの樹となるなり」とあるに因みて名付
けたので、其目的は内基督教の盛んな地方たると外、異教の
行はれてゐる地方たるとをはず人の心を基督に向はしめん
といふにあつた、彼の仲間の中で此事に付て最も熱心な友人
はワッテウィーといふ瑞西の人で、此人は數年後に復彼と一
所になつて事を共にし終生彼の親しき友であつた
こゝにひとつ困たことには彼の後見をしてゐる伯父さんが
當時餘り偏狹に陥るた實信主義の大嫌ひで、どうかして彼の
ハレーで吹込まれた實信臭味を消さなくてはならぬといふこ
とになつたで、とうとう彼は十六歳のとき正信主義の根據地

なるウツテンベルヒの大學にやられて法學を修めなければなら
ないことになつた、加之彼は其身分上知てゐなければなら
ない馬術やら擊劍やらまた實信主義から見ては甚だよろしく
ない無陋の誓古までもさせられ、是等のとは固より彼の好む
ところではなかつたが、よく柔順に勉強し餘暇を以て聖書と神
學殊にスベールとルイテルの著述の研究に従事した、彼は
正名の實信主義者として正信主義の潮流の中に飛込んだので
あるから、人は彼を變物として相手にせず、全く孤立の姿で、
暫くの間は一寸殉教の趣があつた、斯様のわけで彼は嘗て憂
しと見しハレーの生活が今は却て戀しくなり、一方に於ては
ます／＼實信的になると同時に、一方に於て知らず識らずの
間に段々と眼界が開けて行て、ハレーの實信主義の餘りに窮
屈に過ぎることを看破する様になつた、教會内に於ける小教會
といふ實信主義の理想を彼に於て依然固持されたが其形を餘
程大きく廣い包括的のものとなつた、ハレーとウツテンベル
ヒに於ける兩主義の主張者を會談せしめて場合に依ては調
和せしめやうとした彼の奔走は終に成切せずじまつた
彼は十九のときウツテンベルヒを去て見聞を廣めん爲に
二年間ライン地方から和蘭佛蘭西の方へ旅行を試みた彼は
到る處宗教界著名の人物を訪ね、殊に巴里では篤行の間に高
き加特力の大教監ノイエユと極く親しく交際した、かくて
彼は此旅行に於て他の教派、例へば和蘭隨及ひライン地方の

カルヴィン教徒佛蘭西に於ける加特力教徒の中にも幾多の信
憑すべき基督信者があつて彼等は異なりたる有形の教會の内
に散在してゐるが隠然神聖にして普遍なる無形の教會を成し
てゐるものなることを感得した、彼等をして皆一とつならしめ
ん爲に「約翰傳(第十六章二十一)と云ふは爾來彼の祈禱の
一部となつた

千七百二十一年、彼は郷里に歸り祖母伯父の望に従てドレ
スデンなるザクセン政府に任へ宮中兼法律參事の職に就い
た、彼は公務の傍自分の家へ貴賤をわづらふ人を集めて、日に
宗教的會合を催してゐた、併し彼の宗教的抱負は固よりかゝ
るとを以て満足されなかつたが、千七百二十二年に祖母がガ
ロースヘンヘルスドルフより凡一里程離れたベルテルスドル
フといふ地鎮を買て呉れたので、彼は其地主たると同時に其
地に教會の護持主となつてこゝにやゝ其目的に近づくことが出
來た、彼が護持主となつてから幾もなく其教會附の牧師が死
んだので彼は新に自分の目がねに叶たローテといふ極堅い信
仰を以てゐる人を牧師に任じ公務の許す限りドレステンから
ベルテルスドルフの方へ來ていろ／＼教會の世話をしてゐた
新牧師の熱心なる説教は近郷近在より非常に多くの聽衆を引
寄せる力があつて後には教會の増築をしなければならぬ程に
なつた、此年の秋彼はロイスエーベルスドルフ伯爵の令嬢ド
ロテアを娶り終生の好伴侶をえた、而して彼の宗教的活動

の本部となつた、兄弟教團の端緒の開けたのも矢張この年の
とであつた
ザクセンの隣埃太利の州なるバイメンの大王にダヴィッ
ドといふものがあつた、子供の時から加特力の家を生れ加特
力の教育を受けたものであつたが獨逸の方へ旅行して新教の
説教を聞て信者となり、國元へ歸て後密に同胞の間に其信仰
を傳へてゐたところが追々政府及加特力教會の覺知するここ
るとなり迫害が急なので、千七百二十二年の春彼はローテの
紹介に依てチンツェンドルフに面會し國元に於ける事情を訴
へて助を求めたチンツェンドルフは快く之を承諾して自分の
地鎮内のフートベルヒといふ丘を亡命信者の移住地と定め
た、抑このバイメンといふ地方は既に宗教改革の波ト前
第十五世紀の初頃からヨハンフスの感化で大いに新教的信仰
の行はれて居たところで、所謂「フッシーテン」なるフスの信
仰を受け繼いだ人々にはよく幾多の迫害と幾回の戦争に堪へて、
兄弟團といふ教會を組織して居たが夫の加特力の反對宗教改
革の起て以來、是が因となつて最先にバイメンではじまつた
三十年戦争は全く彼等の地盤を碎いて殆ど餘蘄なきに至らし
めた總ての教師は放逐され教堂は取上られ聖書は燒燬され
て幾萬の信徒は或は殺され、或は獄に投せられ、然らざれば
ザクセン、プロイセン、ポリーレン、ポリーレン、ウングアルンの
方へ逃げて行て、殘た者は皆公然加特力教會の所屬にされて

しまつた其中には舊の信仰を持てゐるもの尠くなかつたが物
 變り星移り子孫の時代となつては纔に祖先の代にはかういふ
 ともあつたげなど昔話に残る位になつてしまつたところが第
 十八世紀の初頃から獨逸に於ける實信主義の影響で一二の地
 方では再び舊信仰の復活する模様が見えてきたので、更にま
 た新迫害がはじまつた、彼のダウイッドがチンツェンドルフ
 を訪ねたのは即此時であつた

ダウイッドは一旦伯の許を辭して國へ歸り、同じ年の夏同信
 の者十人ばかりを連れて來て、フートベルヒの一部を切開て
 住家を建た、これが即ヘルンフート(君の守といふ義)の緣起
 である其後此事を傳へ聞いて信仰の自由を渴望するものが踵を
 ついて至り幾くもなく其數三百を以て數ふる程になつた、尤
 も其半はペーメン地方から、其他は獨逸の諸地方から來たの
 で、夫のハレーで知り合つたワッテウ、レーもやがてこゝに移住
 して所謂兄弟四人組の一人としてロイテ、シエーフエルと共
 に大にチンツェンドルフを助けて著述旅行其他出來べき限の
 方法に依て神の國を擴めるとに就て計畫した

社 會 小 觀

▲衆議院の選挙競争をなすに、最も金の入用なるは人力車賃にして、一人前五
 百圓以上は要すべく、全國の確實なる候補者を八百人に見積るも、凡う四拾萬圓
 を費消するものなりと

▲英社兩軍の構和遂に成り、條約も隨て調印せられたりといふ、三年の長日月

に亘りたる南阿の暇争も遂に一先づ一段落を告ぐるに至りぬ、英人の辛抱強きよ
 りも社民の忍耐にして勇敢なる氣象には驚かざるを得ず
 ▲紀州熊野に於て寛政十二年の生れにて、本年百二歳の高齡者ありといふ、性
 頗る快調にして常に諧謔を弄して他を笑はしめ、自分は百十五歳までは生るつも
 りなるが、百十五歳に至れば西國第一の札所那智山にて断食を行ふといひ居る由
 昔は藩長ければ辱多しといふ、今は樂み多しとて云ふべきか、氣樂なるかな
 この翁

▲名古屋市第一中學校生徒三十餘名練兵場にて決闘せんませしを警察の取締の
 爲め幸に血の雨を流さずして止みたりと、苦々しき事なり

▲時事新報社にては本月十日より第三回の慈善旅行を催し、貧民の可憐の兒童
 一隊を率ひて日光邊に向ひたり、洵に美事といふべし

▲廣島保護院は其後養護して振はざるより、一部の僧侶は大に憤慨し昨今同院
 の外に更に新なる出獄人保護方法を設けんと計畫中の由、吾等いたく實行を望む

▲徳川、西郷(東大郎)には授爵、山縣、天山、西郷は大勳位に叙せらる、榮さい
 ふべし

▲萬國郵便聯合加名廿五年の記念として紀念繪葉書を本月十八日より發賣する
 よし▲本月より郵便運送夫の制を改正せり▲清國女學生八名此程留學の爲め來朝
 せり、清國婦人の我邦に留學するは是を嚆矢とす▲大橋圖書館工事落成したるを
 以て近々開館式舉行する由▲東京市にては貧民學校設立計畫の由(四月十三日稿)

小生自今左の處に住居仕候

東京本郷區森川町一番地
 仲通二百四十號

近 角 常 觀